

釧路市南東部海岸台地における遺跡立地について

澤 四郎^{*} 西 幸隆^{**} 松田 猛^{***}

Notes on Condition of Location at the Sites on the Coast
Terrace of the South Eastern Kushiro.

Shirô Sawa Yukitaka Nishi Takeshi Matsuda

1. はじめに

釧路市南東部の紫雲台から三津浦に至る海岸台地に分布する遺跡は、先史時代人にとって交通運搬の道具として、極めて重要な役割を果たした丸木舟発着の限界点に位置すると考えられる幾つかの遺跡が認められる。

ここでは、比較的調査の行き届いた興津遺跡の例を中心に、侵食の激しい海岸台地の遺跡立地についてふれておきたい。

本小論は、昭和50年におこなわれた三津浦遺跡、昭和51年から同53年に及ぶ興津遺跡の緊急発掘等で、地形・地質部門を担当された岡崎由夫先生の一連の業績（岡崎1976、1977、1978）に基礎を置くもので大筋については、既に筆者らによりふれられているものである（澤・西編1977、澤編1978）。

2. 地形の概要と海食の度合い

地形 興津から釧路村又飯時にかけて、海拔高度20m—30mで急崖をなし太平洋に面する海成段丘・釧路段丘とその背後に少し距離を置いて同じく高位の海成の根室段丘が並ぶ地形がみられる。この根室段丘は、興津遺跡北方の桜ヶ岡では海拔高度70mと低い、東へ移るにつれ高度を増し、桂恋及び三津浦付近で、最高90m内外を示し、更に東へ連なるものである。一方、低位の釧路段丘は、又飯時付近が限界で、根室段丘に置き換えられ、消滅する。現海岸線から、根室段丘までの距離は、興津で2km、桂恋で1.5km、三津浦で、0.5km余りである。海岸線は、海水による侵食の激しい岩石海岸を特徴としている。

侵食量 岡崎由夫先生の数値がある（岡崎1976、1977）。これはウルム氷期寒冷極大期以降の海水面上昇運動中の停滞期にできた海底の河谷跡及び縄文海進終了時期の海水準とその後の陸地の侵食量を勘案して得られた値で、三津浦で23.3—40cm/年、興津で45cm/年とするものである。これを基に、沖合いにせり出していた陸地を、続縄文期の三津浦で400—800m、縄文前期、同後期の興津で2—3km—1.5km沖合いにあったと推定されている。

又、現代の侵食量も調べられている（岡崎1976）。それは、昭和22年から昭和42年の20年間に、20mという値であり、これは誤差を考慮に入れても、如何にこの地帯の海岸侵食が激しいものであるかを語る証であろう（註2）。

3. 興津遺跡とその周辺

主題とする海岸台地に分布する遺跡の大方は、根室段丘に水源を有し、低位の釧路段丘の緩斜面を切刻して流れ、開析度を深め、途中、流路の細かい小沢の水を集め、谷幅を広げ海岸と連絡する沢谷の入口付近の台地、即ち陸地奥と海との接点に位置するという共通した立地がみられる。

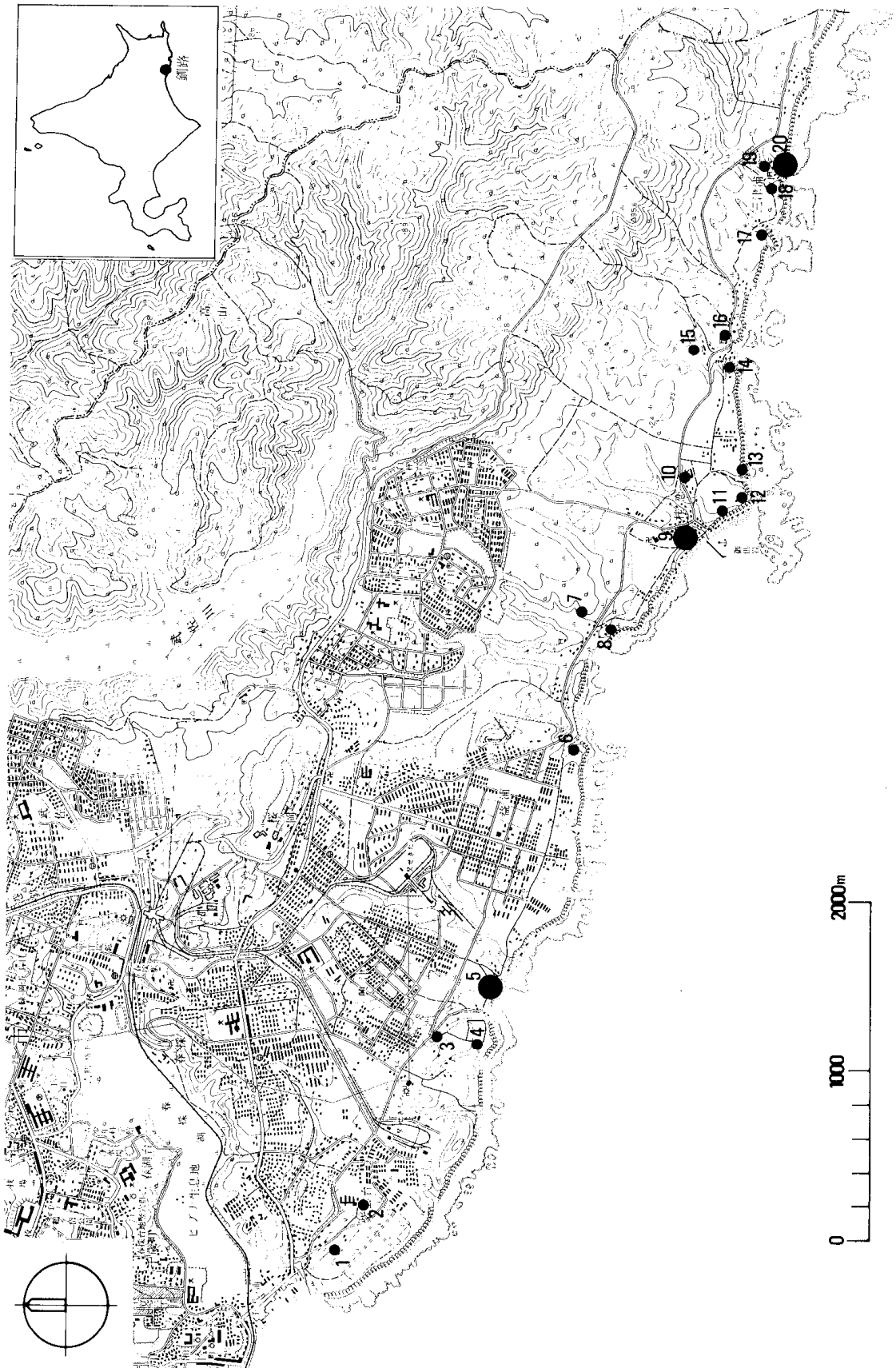
典型的な例が興津遺跡である。ここは続縄文初頭の興津式土器の標式遺跡として、昭和34年に確認され、昭和49年の分布調査、昭和51年から3ヵ年計画で実施された緊急発掘、昭和53年秋の最終的範囲確認調査などを経ており、海岸台地の遺跡の中では、比較的探索の行き届いた所である（澤1959、澤・西編1977、澤編1978）。

微地形 遺跡のある台地は（第1図、同第2図）、溺れ谷状の西側の沢（オコツナイ）と東側の沢（ボンオコツナイ）に挟まれている（註2）。南端は急崖をなし、幅10m内外の砂浜を間にし海に面している。地形図で読みとれないが、東の沢側に、細長い低位（Ⅰ面）、中位（Ⅱ面）の平坦面があり、この上に本来の釧路段丘面が、北東—南西方向へ緩傾斜し、海拔高度24m面で斜角度を加え、西の沢へ移行する地形を呈している。Ⅰ、Ⅱ面は、特別の成因によらず、土砂崩れなどによる二次的な面である。Ⅰ面は海拔4—5m、幅7mの堆積面で、Ⅱ面は海拔16m、幅7m、長さ20mを計る。Ⅲ面は海拔28mを最高に、24—25mで囲える遺跡の主体をなす面で、北方の根室段丘へと続いている。

湧水は、西の沢の二股付近と東の沢の二股から少し下った湾入低地に著しく、ここでは小規模な湿地を形成している。

本遺跡を特徴づける二つの沢谷口の幅はともに30m内外で、二股までの途中、多少の出入り、膨みを有する。

※、※※釧路市立郷土博物館 ※※※釧路市埋蔵文化財調査センター



第1図 釧路市南東部海岸台地の遺跡分布図

1. 紫雲台遺跡 2. 養老院裏遺跡 3. 興津入口遺跡 4. 興津西遺跡 5. 興津遺跡 6. 益浦坂上遺跡 7. 岩見浜遺跡第2地点 8. 岩見浜遺跡第1地点
9. 桂恋チャシ(桂恋遺跡) 10. 桂恋教員住宅裏遺跡 11. 桂恋方形チャシ及び附近 12. 桂恋カヌイ岬遺跡 13. 桂恋フシココタンチャシ及び附近
14. 毘沙門2遺跡 15. 毘沙門1遺跡 16. 毘沙門神社遺跡 17. 三津浦安田遺跡 18. 三津浦古谷遺跡 19. 三津浦遺跡第2地点 20. 三津浦遺跡

台地奥から下る急流の小沢は、二股までで、ここから、流れは海底の延長線上にある沢谷底を緩く傳つて、海に注ぐ。川床は、二股を境に段差を持ち、沢幅も狭くなる。西の沢口から二股までの距離は、160mで、東の沢はこれより深く、汀線から250m奥に入っている。

東西の沢は、縄文海進マキシマムに、海湾をなしていたと言われる（岡崎1977）。新しい時期にあつても、満潮時の海水の侵水、今以上に多い沢水の流入などが想定され、かなり後まで、適当な水深の入江の存在が推定できる。これらのことから、本遺跡は、或る時期まで、丸木舟の発着の限界ぎりぎりの所に位置していることが窺える。**規模** 遺構、遺物の広がり、東西170m、南北110mの範囲にみられる。湧水地のある湾入部を結ぶ線以北には認められない。東側ではⅠ、Ⅱ面を含み、南側は崖線で切れ、西側は海拔20mラインから上である。

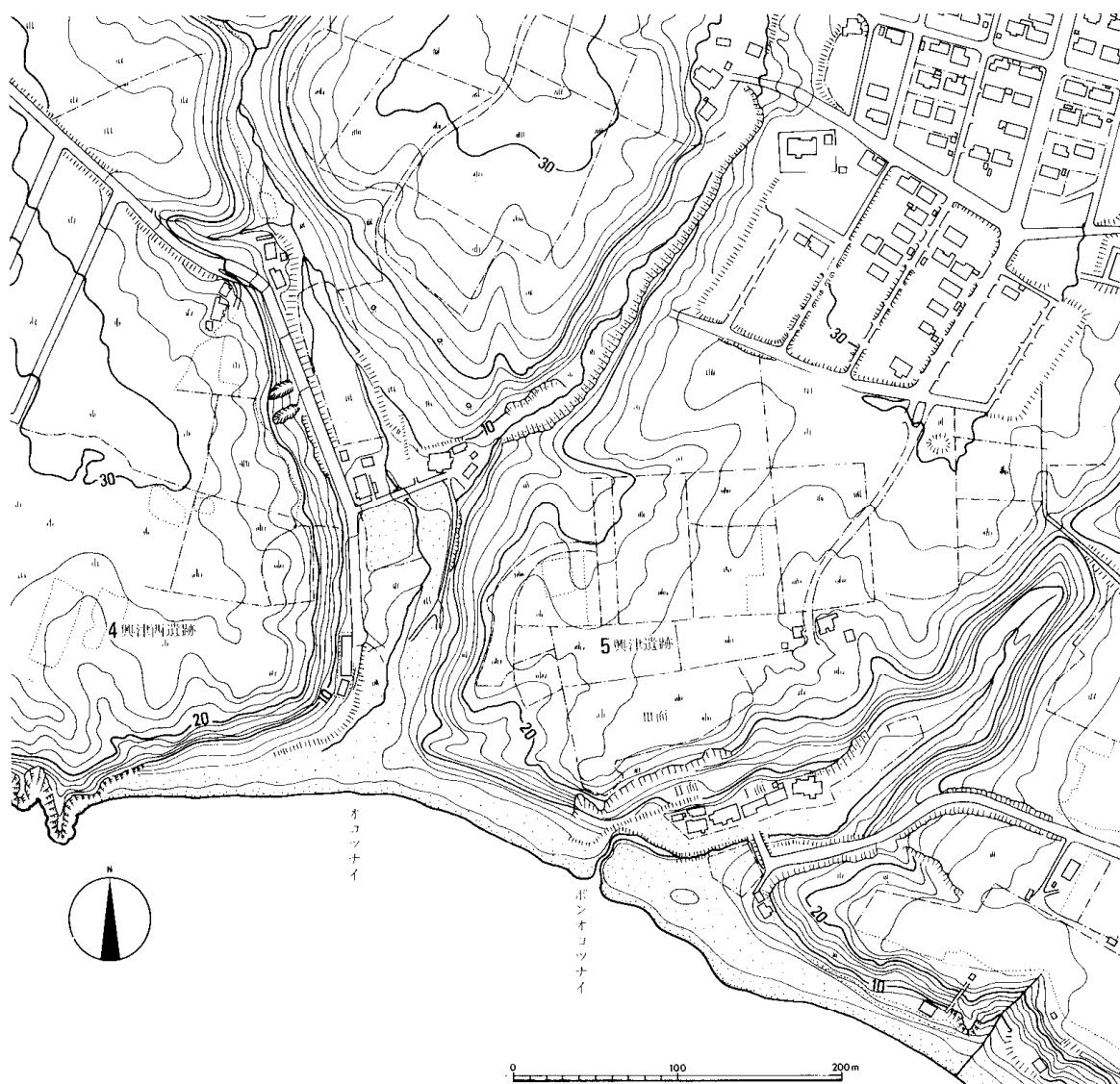
遺構と遺物 縄文早期・前期・中期、続縄文期、擦文

期の遺構と遺物がある。縄文早期は石鍾である。

縄文前期は、微量の土器片とこれに伴う可能性の強いベニガラ、人骨片が残存した墓壇1例で、付近にこの時期の遺跡はまったくなく、主体部の行方が問題である。2、3km先に出ていた陸地を思えば、既に失なわれた疑いが濃い。

縄文中期は北筒Ⅱ式、同Ⅲ式土器、石槍、石鏃、剥片を再加工した石器、磨製石斧などである。焼土の広がりもある。遺物量はそう多くはないが、Ⅲ面全体にスポット状に認められ、特に海岸沿いに東西に带状に分布する傾向があった。範囲確認調査では、西の沢の湧水地の低地に面し、住居址1、2軒分の存在が確認されている（註3）。

続縄文期の遺構、遺物は多い。分布は全面に及んでいる。土器として緑ヶ岡式、興津式を経て後北B式併行期に至る数型式の土器群がある。石器も石鏃、石槍、靴型



第2図 興津遺跡付近地形図

石匙、削器、磨製石斧、装身具類など直接、間接の生産用具類を含み豊富である。遺構としては、竪穴住居址（11軒）、墓壇、墓壇様ピット、焼土など多彩である。ほかに遺構は未発掘部分にも広がっており、昭和52年の確認調査では、発掘区の北側に住居址5軒以上が推定されている。南端崖際に発見された住居址の1例は、4分の1が崩落してなかった。この時期をおよそ2,000年前から1,300年前と想定し、先の45cm/年の海食量で単純に計算するならば、陸地は、沖合い900m—600mにあったと推定できる。

擦文期では、終末期の土器片10個体分があるのみである。当地方におけるこの期の集落は、大きな川の河口地帯に集中するくせがあり、海岸台地には稀れなので、別な状況を設定して考える必要があるようである（澤・西1975、1976）。

付近の遺跡 周辺には、本遺跡を軸に径約3.5kmの円内に収まる5箇所の遺跡がある（第1図1～3、5、澤・西1975、1976）。断言を憚るが、いずれも、過去の踏査では、小規模遺跡という所見を得ているものである。時期は、

2の沼尻の沢奥に面した擦文集落（1、2軒）を除き、縄文中期、続縄文期である。ほかに、故安倍寛次氏の採集資料に春採海岸出土と明記した北筒式土器片があるが、地点を特定できない（澤編1971）。

以上のことから、先史時代に丸木舟の発着に格好の入江を提供した東西二つの沢と、これに挟まれる台地と、その利用者のかかわり合いは、縄文早期にはじまり、中期に利用度を増し、面積を広げ、続縄文期に最も濃密となり、擦文期に劣えたものであることが分る。縄文海進以降、入江の水位が、丸木舟運行に支障をきたさない程度に保たれていた時期の終りも、ほぼ、これらの台地の利用度から、類推できる。続縄文期に利用度が高いことは、それを探る上で一つの目安となろう。又、周辺に小規模遺跡が点在する中で、本遺跡のみが、ずば抜けた規模であることは、一般的に考えられる居住条件のほかに、狩猟、漁撈、採集などの生産活動面で、重要な役割を果たしたとみられる如上の入江の存在が、大きな理由の一つとして上げられる。



第3図 桂恋フシココタンチャシ付近地形図

4. 桂恋遺跡と三津浦遺跡を含めて

興津以東で、直接海へ注ぐ沢は、オソツナイ、桂恋、毘沙門の沢と三津浦の4つの沢である。三津浦の東西を画する二つの小沢を除けば、興津と同規模か、それより大きい。各沢の川床は、興津と違い、沢口付近で段差をとるところにある。

最大のオソツナイの沢は、幅広く、奥行きも深く、白樺台の分水界を越えて、反対側の武佐の沢と連絡がとれるが、統縄文前半の資料をみる第1図7、8の痕跡的な遺跡を認めるのみである。同じことは、第1図14～16の3遺跡のある毘沙門の沢についても言える。海側は断崖であり、沢口の両側面に、集落を構える平坦面がないところから、主要部は海中に崩落したとみられる。

桂恋の沢は、サンケオマナイ川の開析によったものである(第3図)。沢谷口の幅は4—50mもあろうか。60mほど奥の西から入る浅い沢を通る道路までは、30m幅で続き、これより先は、主として東から入る小沢が幾つか並び二股がくり返される。川床と海との段差は4m内外あり、縄文海進の入江は、道路を越えた100mぐらいのところまでしか届かない。

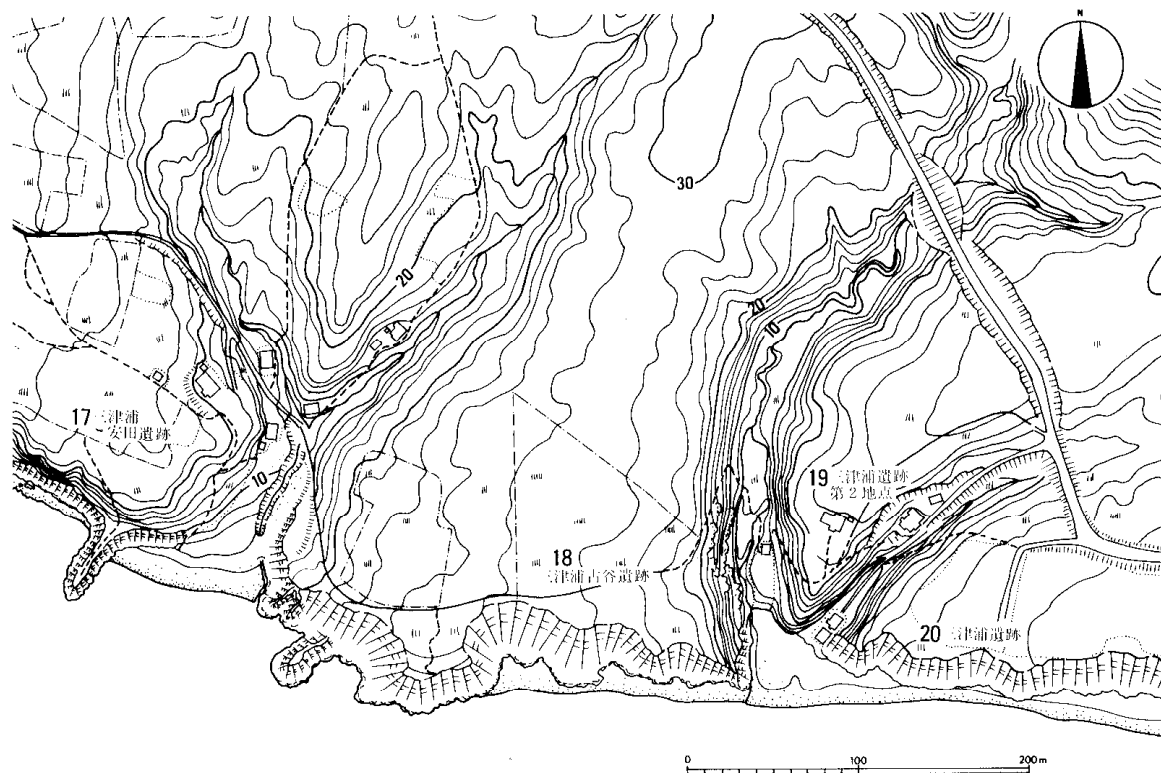
この辺の遺跡は、海拔高度20m—24mの緩斜面と24mの平坦面に展開している。沢の西側末端では、海拔5mにできた平坦面にもある。ここは、桂恋チャシを含む東西300m、南北200mの西端である。桂恋遺跡は、縄文

早期、同中期、統縄文前半、アイヌ文化期にまたがる各時期の遺物が出土しているが、最も広い面積にわたり、遺物量の多いのは統縄文期である。遺構として、竪穴住居址(縄文中期、統縄文期)、墓壇(統縄文期)、チャシ(アイヌ期)、貝塚(アイヌ期?)がある。

東側には、第1図9—13の遺跡が並ぶ。12と13の間に滝をなす浅い沢がある。この一帯は、地続きに統縄文期、アイヌ期の遺構・遺物が広がるもので、フシココタンチャシは、その東端の核をなすところである。第1図12、13の遺跡では、統縄文期の包含層が、海崖で断ち切られているが、チャシがほぼ現形に近い状態にあることから、その構築時から現在まで、地形にそう大きな変化がなかったのかも知れない。

三津浦には、第1図18の古谷遺跡を中心に、西に17、東に19、20の遺跡がある。17の安田遺跡は、フシココタンチャシから、1.8km離れて位置し東西250m、南北90mの縄文中期、統縄文期前半の複合遺跡である。統縄文期の遺構は海崖で切られている。沢一つへだてた古谷遺跡は、東の沢寄りに円形11、方形23、八角形1の計35軒の竪穴をみる。形状から推して、縄文中期、統縄文期、オホーツク期にまたがるかと思われる。かつては、南北300m、東西200mの範囲に多くの竪穴があったらしい海側は、断崖をなし、下は波食を受けている。以上の三つの遺跡は、海拔高度25mの平坦面にある(第4図)。

第1図19、20の遺跡は、三津浦遺跡第2地点と同第1



第4図 三津浦遺跡付近地形図

地点である。前者は、続縄文期前半の竪穴住居址2、3軒分の遺跡である。後者は、縄文中期、続縄文期の遺構・遺物がみられた(澤・西編1976)。主体をなすのは、続縄文期で、竪穴住居址3軒、石囲いの炉址、墓域、配石遺構、骨塚などが検出され、面積は、東西90m、南北60mと狭いが、興津遺跡をはるかに上回る膨大な量の遺物が出土している。続縄文期の包含層は、海側では、崩落し、竪穴住居址なども、一方を欠く例があった。川床は、現海岸で、3～4mの段差を有している。これは、先に述べた17、18の遺跡間でも同じである。三津浦の東西を画する沢も同様で、これらはもっと傾斜がきつい。

以上のように、桂恋・三津浦一帯の海岸台地においては、続縄文期を主体とした遺跡が大きな沢の入口付近に展開するといった点で興津と共通の立地を示すが、沢底が高く、沢口から深い海底へ移行するといった傾向が支配的であり、若干様相を異にしている。又遺跡の大きさの点でも、異なり、こちらの方が、規模の大きなものが少なくない。遺構・遺物面でも、桂恋では、時間的な幅があり、特にアイヌ文化期に特有のチャシが近接して3箇所が、ほぼ、そう海食を受けることなく、現存することが注目される。これらのことは、地理的な位置も加わる遺跡の性格の違いに由来するものであるが、一方では、チャシの構築期から、今日まで、地形に余り変化がなかったという側面が窺え、興味あるところである。

5. む す び

釧路市南東部海岸台地の遺跡は、激しい海岸侵食の過程で、現在の立地と分布をみるものであるが、主要遺跡の立地は、小河川の注ぐ縄文海進時の小海湾、もしくは、それ以降の時期においても、丸木舟の運行に際し、発着に可能な状態を備えた入江状の沢付近に位置していると言えそうである。この典型的な例が興津遺跡であろう。後述した桂恋、三津浦付近の遺跡では、現海岸線近くが、その限界線といえることができる。

われわれは、ともすれば、海岸台地の遺跡立地を、現況において考えがちであるが、この地帯に関する限り、以上にみる通りである。

目下、当館では、昭和59年度終了を目途にエリモ岬からノサップ岬に至る海岸線の総合調査を進めているが、先史の分野からは、こうした視点からも、検討を加え、その全体像を把握していきたいと思う。

末筆ながら、常日頃ご指導をいただいている岡崎由夫先生、興津の沢の地名等でご教示を得た佐藤有紹氏に対し、銘記して感謝したい。なお本稿は、図版を西・松田

が作成し、本文を三人で検討しながら、澤・西が大急ぎでまとめた。もし、遺漏の点があるとすれば、それはすべて執筆担当者の責任である。

註1) 昭和22年9月の空中写真(約4万分の1)と昭和42年5月の空中写真、これを基に作製された2万5千分の1各海岸線を比較したもので、資料とした写真、地図の縮尺が2倍ほど相違することから、誤差が大きいとしている。

註2) 大正13年6月25日(花輪日曜堂)発行の10万分の1地図(釧路支庁国管内図)にこれらの川の名が明記されている(佐藤有紹氏御教示)。

引用参考文献

岡崎由夫(1976) 三津浦遺跡の地形、釧路市三津浦遺跡発掘報告、P43—53、釧路市立郷土博物館。

岡崎由夫(1977) 釧路市興津遺跡の地形・地質、釧路市興津遺跡発掘報告、P44—48、釧路市立郷土博物館。

岡崎由夫(1978) 興津遺跡の地形と海岸地形、釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ、P85—91、釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター。

澤 四郎(1959) 第1回市内遺跡調査覚書—益浦・興津・桂恋方面—、釧路博物館新聞、No.94、P121、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎編(1971) 安倍寛次寄贈資料目録、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎・西 幸隆編(1975) 釧路市桂恋フシコタンチャシ調査報告、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎・西 幸隆編(1976) 釧路市三津浦遺跡発掘報告、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎・西 幸隆(1975) 釧路湿原周縁の遺跡分布、釧路湿原総合調査報告書、P301—336、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎・西 幸隆編(1977) 釧路市興津遺跡発掘報告、釧路市立郷土博物館。

澤 四郎編(1978) 釧路市興津遺跡発掘報告Ⅱ、釧路市立郷土博物館、釧路市埋蔵文化財調査センター。

澤 四郎・西 幸隆(1977) 釧路湿原周縁の遺跡分布の変遷、釧路叢書第18巻、P395—428、釧路市役所。

山本文男(1972) 釧路市紫雲台遺跡、釧路市立郷土博物館館報、No.214、P7、釧路市立郷土博物館。